

ガラガラにっぽん

明日の東京を考える女性の会

代表 原 晓美

私達ガラガラにっぽんのメンバーは、1995年、東京都知事選挙の時に、日本を“本当にいい国にしよう”という熱い思いをそれぞれが胸に抱き、自らボランティアに参加してきた仲間達です。選挙が終わってからもその熱い思いが冷めず、このままでは日本はどうなってしまうのだろう！大前さんの提唱している生活者主権の社会を実現させなければ！私たち女性に何かできることはないだろうか？こんな会話を交わしているうちにいつの間にか15人が集まり同年6月にスタートし、現在35人での1周年を迎えました。

1年目は、会の主旨、目標を明確にすることに重点を置き、今後の会の運営の中心となる組織作りをしてきました。

主旨、目標は、大前さんの提唱している生活者主権の社会の実現

組織作りはメンバーの大部分が主婦なので、無理なく続けていけるよう、またそれが自分の役割に責任をもって行動できるよう細かく分担してみました。そして現在は月1回の定例会を開催しています。

ガラガラにっぽんのメンバーの良いところは、自らの考えをはっきり言えること、他の人の考えを聞く耳を持っていること、時には激しく議論しあっても決して後にしこりを残さないことです。それでもう一つ20代から70代と幅の広い年齢層で構成されているのでいろいろな角度から物事を判断することが出来ます。そしてなによりも、日本を愛する熱い心を持っています。

さて2年目に入ってこれからが大変です。目的を確実に達成するために戦略を立てなければなりません。定例会では住専処理問題、薬害エイズの真相究明、情報公開制度、高齢化社会への対策、受験中心の教育など、テーマを決めて話し合ってきました。そして最後はいつも、「一人ひとりの考えが変わらないと社会も変わらないのではないだろうか」「それには教育が大切で、人格に最大の価値を置く教育が必要とされるのではないだろうか。」という結果にゆきつきますから本当に不思議です。どんなテーマで話し合っても必ず最後は同じです。一人ひとりの考えが変わるとか、人格重視の教育というものの原点は一番小さな社会「家庭」にあり、誰から教わるというのではなく自然に長い時間をかけて育まれてゆくのではないでしょうか。戦後の混乱の中から50年という月日が流れ時代と共に人々の暮らしは豊かになってゆきましたがその代償に失ったものの大きさに今多くの人々が気づき始めているように感じられます。この事がガラガラにっぽんの「目的達成の戦略」のヒントになるような気がしてなりません。

政治も、教育も、医療も、私たちの社会生活の全ては「誰のためなのか？」を考える事が基本ではないでしょうか。そしてこの事を一人ひとりが感じ行動してゆけば必ず日本は「いい国」になってゆくのではないかでしょうか。

ガラガラにっぽんは、これからもいろいろな方法を試みて、多くの人々に「気づき」のメッセージを発信しつづけてゆきたいと思っています。